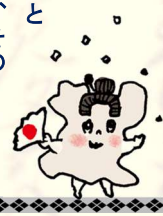
盛岡城日記

雑書

Vol. 8　2024年1月

年が明けて、二〇二四年が始まりました！
今回は、今年が「辰年」であることにちなみ、その縁起物としての意味も込めまして、史資料調査で確認された様々な「龍」を集めてお届けします。



当室では、建物内部で使用されていた建具や装飾金具などの意匠についても調査を進めています。
そこで確認される板戸や襖絵、欄間、掛軸などには、南部家の家紋となっている鶴をはじめとした多種多様な鳥や、虎・猪・牛・鹿・亀・兎・獅子・鳳凰等の動物も多く描かれます。
全国的に、寺社や神社などの古くからの建造物において、龍をモチーフとした意匠等をよく見かけますが、実は「南部家歴代当主画像」に描かれている当主三十五人のうち、三十人の兜にも、龍の前立（兜の前方につける飾り物）が据えられています。前立は武士が己の信念や存在を示すための装飾であったとされ、南部家がその前立とした龍が盛岡城の意匠として用いられていても、何ら不思議はありません。
今も残る建具や装飾品等にはただの意匠としての情報だけではなく、往時の時代背景や流行、当主の好みや意図なども見え隠れしており、その背景に潜む物語にも思いを馳せて楽しむことができます。

◆◆◆◆◆

盛岡城内の意匠については、まだ憶測の域を出ないものではありますが、これらが調査の中で確認された盛岡藩に残る史資料であることは確かです。
今年は、干支でいうと「甲辰（きのえ・たつ）」となり、「はじまり」と「成長」を意味するともいいます。実は盛岡藩主とも縁があった「辰（龍）」を干支とするこの一年、これまでの取組を糧として種から芽を出し、成長を遂げられるような年となるよう、日々を積み重ねていきたいと思います。

盛岡城小噺 第8話

＃海外からの訪問者

盛岡市は、昨年１月にアメリカのニューヨーク・タイムズ紙が発表した「2023年に行くべき52カ所」に選ばれ、昨今は、海外から盛岡城跡公園を訪れる方も多く見受けられます。実は今から150年以上前、盛岡城の建物の多くが現存していた時代にも、異国から盛岡を訪れた人々がいました。

その中の一人が、チャールズ・ロングフェローというアメリカの青年です。彼は、明治維新後すぐの日本に１年８か月ほど滞在し、全国各地を巡る中で、盛岡にも訪れました。その記録には、彼の視点から描いた盛岡城の様子や城下町に暮らす人々の姿など、往時の「盛岡」をイメージできるような記述が多々散りばめられています。

ウージェーヌ・コラッシュというフランス海軍の士官も、その一人です。雑書と同じく盛岡藩家老席の日記である「覚書」にも、「佛人」等の表記でコラッシュのことを示す記録が残っています。彼は、横浜停泊中のフランス艦隊から脱走し、幕府側として戊辰戦争を戦った人物です。盛岡藩内で捕虜となり江戸に護送されますが、その道中で２日間ほど盛岡に滞在します。フランスへの帰国後にその時の様子を語っており、そこには、彼が見た盛岡藩内の美しい情景とともに、江戸までの護送を行った盛岡藩の藩主と藩士たちの人柄や心遣いを賛辞する言葉が多く並びます。

市民が持つあたたかい人柄や心遣いは、「盛岡」の魅力の一つです。遥か昔から受け継がれてきたこの魅力が、今回のニューヨーク・タイムズ紙での評価にもつながったのかも知れません。

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。
盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、
盛岡城復元調査推進室（019-613-7956）まで、
情報提供をお願いします。